

忠勤を抽んで、惹いては住吉社領堺莊の住民が南山に誠忠を捧ぐるに到る深き因由を述べて次下の本論への伏線たらしめてゐることに著目することにより高く評價さるべきものと考へられるのである。かくして吉野朝廷成立の後には、「その前衛として、財源地として、そして又西國の官軍との聯絡を保つ交通の要地として」大阪地方に新たなる意義が發生したとなす著者の一貫した主張の下に一々の零細な事象が悉く意味づけられ、全體への連繫に於いて整然と配合されてゐるのを見る事が出来る。叙述の主要な對象が攝河泉の境に置かれてゐながら、而も京師はもとより遠く東國より西海に亙る兩軍勢威の興亡と戰況の推移、離合極まり無き武家方諸將の向背の事情が絶えず語られてゐるのも、決して冗漫な粉飾として加へられたのではなく、本書が著者自身によつて把握された吉野時代史の體系の發表である以上、當然缺くことを許されぬものとして導かれて來てゐるのである。謂はゞ單なる報告書としてよりも、寧ろ單行本として世に贈られることの望ましい、好著と稱して謬らないであらう。(本文一三三頁、圖版二五葉)〔稲葉慶信〕

『敦煌石室寫經題記』與『敦煌雜錄』

許國霖編

西紀一八八九年明治二十二年 Power 大佐が偶然支那土耳其斯坦の一地點なる Kutchu に於て婆羅門文字を以て書かれた古文書を發見して以て、中央亞細亞地方に多數の史料の潛藏せられ居るなら

むこと東西の東洋學者の意識する所となりしが、次で一八九三年明治二十六年 Khoutan 地方にて Kharostu 文字を以て書かれた古文書の出土するあり、恰も時を同じくして Kashgar 駐劄の露西亞總督 Petrovski 將軍が多量の素焼の陶器と古文書とを發見するあり、該地方一帯が東洋史研究上の未知の資料の寶庫ならむこと愈々學界に注意せられ、學術的探險隊を組織して該地方に派する機運東西に起る。乃ち露西亞の Klemenz 英吉利の Sir Aurel Stein、獨逸の Grünwedel 及び Le Coq、日本の大谷光瑞、橘瑞超の諸氏、佛國の Paul Pelliot の如き人々何れも此の地の學術的調査・史料調査を行ふこととなつた。Pelliot 博士が甘肅省敦煌縣の千佛洞に於て得る所の約六千點の古文書は佛國々立圖書館に、Stein 博士の得たる所の約六千點のものは大英博物館に、それ〴〵世界の寶として度藏せられて居る事は周知の通である。此の古文書の持ち去られたる一九〇七・一九〇八年明治四十一年頃には支那は清國政府にして、斯くの如き貴重資料の海外に出でたるに驚き、一面に於て敦煌の地方官の怠慢を處罰し、一面に於て北京より官吏を現地に派遣して殘部を悉く北京に釐致した。今日國立北京圖書館に藏せらるる敦煌發見資料はそれである。

此等の所謂敦煌發見資料は、私が佛國にあるものを悉く調査したる經驗に徴すれば、北魏の道武帝時代より北宋の太宗時代に亙る約六百年間に或は敦煌地方にて書寫・撰述せられ、或は中原の地より敦煌地方に送られたるものにして、墨汁・毛筆を以て紙面に手寫(若干縮幅あり)したる經典史籍・佛教經文・道教經文・官

公署公文書・民間私文書・具注曆等にして、經典史籍・道佛經文類は大抵天地曲尺九寸五分内外の卷子本、而して各卷の長さは短き零片と雖も曲尺二尺を下らず、その長きものに至りては曲尺三十尺・四十尺に及ぶ。紙表には概ね野界線を畫し、其の幅員大抵曲尺五分内外、多くは黃麻紙である。その他のものは各々其の文書の性質目的に適應せる大小の紙幅を用ひ概ね野界線を畫せず、官公署の牒文、地方官民の狀文、民間の契約書類の如き何れも此の後者に屬する。

本來此の敦煌文書の密藏せられた経緯は明確でないが、調査の結果より觀ると敦煌地方から四川方面に互り營て存したる乾明寺、蓮臺寺、淨土寺、報恩寺、龍興寺、大雲寺、靈修寺、聖光寺、法海寺、乾元寺、開元寺、靈樹寺、永安寺、安國寺、大乘寺、普光寺、金光明寺、靈圖寺、三界寺、永康寺、觀音院、周家蘭若、官婁蘭若、安清子蘭若、北形多保蘭若、樂家蘭若、軍門蘭若、興善寺、禪定寺、應明寺などにて製作寶藏預藏集藏したるものをば北宋の太宗時代に其の散逸を懼れて何人かか纏めて封藏するに至りしものらしく、種類から謂ふと支那經籍史書類、漢譯佛典及其義疏類、道教經典及其義疏類、敦煌郡地方官署公文書類、敦煌郡地方住民私文書類、佛寺公私文書類、儀軌書類、具注曆日書類、陰陽占星書類、支那文學及俗文學類、敦煌郡地方地理書類、敦煌地方少年子弟教育書類、辭典及類書類、醫方書類である。大英博物館や北京圖書館所藏のものも大抵之に類する性質と種類とのものなること想像が付し得られる。佛國のものは幸に私が滯佛中に調

査したが、英國のものは僅少しか見ず、北京のものとは從來全く調査の結果が報告されて居らぬ。

此の二書の編者許國霖氏は湖南省の人で、胡鳴盛氏の門人、北京所藏九千八百七十一點の敦煌發見資料を精査し、その寫經の識語を逐録編纂したるものが『敦煌寫經題記』で變文・偈讚・音韻・文疏・契約・傳記・目錄・雜文書を逐録編次したるものが『敦煌雜錄』で、つまり北京にある敦煌文書の調査報告書である。寫經題記にてその年次の最古のものは北魏文成帝の太安四年西紀四、五七七年、最下のは宋の太宗の太平興國二年西紀九、七七年であると謂ふ。佛國にあるものは年次の最古は私の調査では第參〇壹六號紙背文書の北魏道武帝の天興七年西紀四、四四年、最下は第參貳九〇號紙背文書の北宋太宗の至道二年西紀九、九九年、年次の上限・下限何れに於ても北京のものが佛國のものの中に包含されて終ふ譯である。

『敦煌雜錄』の方には叙上の變文以下雜類に至る八項に分ち、合計十二篇の變文殘簡、三十五篇の偈讚、九篇の音韻書、十四篇の文疏、十八篇の契約文書、四篇の傳記類殘卷、四篇の目錄類、十五篇の雜文、總計一百拾壹通の文書を逐録しありて、何れも貴重なるものであるが、唯私の佛國にあるものを調査したる知識に準據して之を見ると、原典にも當字・誤字もあらうが、許國霖氏が逐録に當りて、原典の文字を誤讀して逐録したるものが相當に多いと思はれる。本誌第二十三卷第四號掲載の拙稿『唐代の社邑に就きて(下)』の附記第二・附記第三に於て私の指摘したるが如き原典誤讀は、本書を通じて至る處に充滿して居る。史料の逐録で

は、原典の文字を正しく傳へること、文書の本様式を破壊せぬこととは何と申しても最重要事であるに、斯かる誤讀の多いのは實に大瑕瑾で學に患なる逐録とは申せぬ。本書を利用せらるる人は餘程注意せなければ意はざるの結果を招くであらう。それは更に角北京にある敦煌文書の大體を知る爲には蓋し便利なる調査報告書である。一昨年六月の刊行とあるも、我が邦へはじめて舶載せられたのは昨年八月下旬であつた。(全二冊、商務印書館發行、價貳元四角)〔那波利貞〕

支那の建築と藝術

關野 貞著

故關野博士が伊東博士とともに支那建築史の開拓者であり、權威者であつたことは誰も知つてゐるが、その勞作は、大著『支那佛教史蹟』とか、『熱河』とか、『遼金時代の建築と佛像』や朝鮮關係の著述以外はあまり親まれてゐない。それは多く建築雜誌とか、美術工藝の諸著録に載せられてゐるため、歴史家のこれを利用する人は至つて少いのである。したがつて、いまこゝに博士の論文集が刊行され、多くの人々が容易に近きうることになるのはまことに有意義なことである。その最初の一冊『支那の建築と藝術』の紹介にあつて、預告された爾餘の各冊が速やかに出そろはんことを祈つてやまない。博士が細密な考證をされたことは法隆寺の論争などにはよくあらはれてゐるが、へいぜい博士の大著に親んでゐると、さういふ點は見逃しやすく、たゞ大きな仕事をした

方だといふ風に印象されるが、かうして論文集が出て見るとやはりその細緻な學風がよく偲ばれる。

まづ全篇を綜括することく、劈頭に「支那藝術史概説」がある。建築を中心に彫刻、繪畫、工藝と廣範圍にわたつたり繪畫に關する點のみが少いのはてうど博士の研究された範圍を反映したもので偶然でない。これを伊東博士論文集の綜括篇である「支那建築史」とか、「東洋建築史」にくらべて見るとやはりそれぞれの人の特色をあらはしてゐると思はれる。また大村西崖氏の『東洋美術史』などにくらべて見ると、大村氏の文獻的なのに對しこれは全く實物に即してゐて、たしかに一段の進歩といふことができよう。

「支那の陵墓」も博士研究の大きな分野で、晩年東方文化學院における研究の主題であつた。上は周の文武王陵から下は清朝の帝陵に及んだ叙述で、それがみな實地の踏査にもついでゐるのであるから、全く他人のまねできないところである。「支那の瓦及び磚」支那六朝以前の墓塚に就ても古墓研究上注意さるべきものであるが、「支那碑碣の様式」西安府文廟及び碑林「曲阜文廟同文門と濟寧文廟戟門に保有された碑碣」等は石刻研究上見逃すことのできぬ記録であり、また研究である。讀んで西安碑林の條に及べば、誰もその叙述の簡結であつて、要領をえてゐるのに喜ぶであらう。「南北朝時代の塔と健陀羅塔との關係」は塔婆東漸のあとを論じ、「嵩嶽寺十二角十五層塔」は嵩山にある唯一、最古の塔婆を紹介し、「慈恩寺大雁塔と薦福寺小雁塔の彫刻圖樣」はこれらの唐代塔婆を紹介するとともに、その楣石線刻の佛殿圖より唐